

受賞の言葉

二十代半ばに文芸の世界の片隅に入れて頂いた時から、いつも私の心にあったことは、自分はこのあとどんなものを書いていくのだろう、何を目指したらいいのだろうということだった。

にも拘わらず、三十代、四十代と年代が進んでいっても、作家として熟成する己のイメージを描くことがまったく出来ず、ただ腕を伸ばして届く範囲にある絵の具で作品を描くような仕事の仕方をしてきてしまったと思う。

しかし、この作品が五十代最後の長編になりそうだと思った時、何故だか「もうこのまま重厚さからかけ離れていてもいい」という勝手ながらも清々しい気分を襲われ、自分の作品の中では楽しんで書けたものになった。すると意外なことに自分の子供くらいの年齢の若い方が沢山手にとって下さった。

住む場所も自分で選択できず、仕事もそれほどプロフェッショナルに徹することが出来ない、きつと現実にといたら年齢のわりに幼稚なヒロインの女性の翼が、私が思っていたよりずっと空高く飛んで、宇宙のとぼ口あたりまで見せてくれたことに今とても驚いている。選考委員の皆様、関係者の皆様、そして私の本を読んで下さった読者の皆様、どうもありがとうございました。